
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第29号 2022年3月

徳川期大坂城南外堀普請の計画とその経過

Planning and Construction Process of Osaka Castle Minami-sotobori

北野 博司 | KITANO Hiroshi

徳川期大坂城南外堀普請の計画とその経過

Planning and Construction Process of Osaka Castle Minami-sotobori

北野 博司 | KITANO Hiroshi

Regarding the construction of *Minami-sotobori* of Osaka Castle in 1628, the process from planning to completion and repair was reconsidered based on the blueprint ("*Yasutoshi Sato* document") and financial statements between *daimyo* who participated in the construction ("*Hachisuka* document") and the sketch map of Osaka Castle at that time.

The original plan that Hidetada Tokugawa and Takatora Todo came up with in 1619 was a seven-sided stone walls. In 1625, when the concrete construction work was started, two plans, A and B, with different corner positions coexisted. The works in 1627 was postponed, and by the time the Shogunate began to materialize the construction plan the following year, the plan had been decided on Plan A. It was the appearance of completion.

Keywords:

大坂城、南外堀、公儀普請、丁場割絵図、佐藤恭敏家文書、蜂須賀家文書

Osaka castle, *Kogibushin* system, *Minami-sotobori*

徳川期大坂城南外堀普請の計画とその経過

1.はじめに

元和6年(1620)から始まった徳川期大坂城普請の経過や公儀普請の参加大名については、普請丁場割図や文献史料を渉猟した長い研究の蓄積(小野1890、岡本1970、内田1982、松岡1988、渡辺1989、中村1986・2009など)がある。周知のとおり、徳川期大坂城の本工事は元和6年の第1期、寛永元年(1624)・2年の第2期、寛永5年(1628)の第3期と、都合3回にわたって実施された(図1)が、本稿では第3期に実施された南外堀普請の計画と工事経過を検討対象とする。

近年、木越隆三は関係絵図の総括的な研究に、『佐藤恭敏家文書』(春日市奴国の丘資料館蔵、春日市教委2005、以下では佐藤家文書と呼称)所収の第3期工事に係る計画図、工事費精算に係る大名組算用帳に検討を加え、表題について新たな見解を示している(木越2012a、2012b)。

木越は大坂城南外堀の縄張りの変遷を4段階に整理した。第1段階が甲2期図⁽¹⁾(「大坂御城図」蓬左文庫、名古屋市立図書館蔵)にみられる着工直前の姿で本石垣は6面構成からなる。第2段階が寛永2年の佐藤家史料2・史料3の7面構成。第3段階が佐藤家史料5の7面構成。第4段階が17世紀中葉～現在の姿とした(図2)。また、南外堀の水敲石垣83号壁の有無を指標とする乙A類図と乙B類図の違いは年代差ではなく、絵図の成立過程に起因するものとした(木越2012b)。

本稿ではこの変遷案を検証する過程で生じたいくつか

の問題点と論じ残された課題について、『佐藤家文書』や『大坂御普請之御帳』（蜂須賀家文書、国文学研究資料館蔵）を参照しながら再考してみたい。

2.『佐藤家文書』絵図の再検討

(1) 佐藤家文書

『佐藤家文書』は大坂城のほか、福岡城、福岡藩江戸屋敷、黒田職隆石塔、福岡藩長崎警備関係資料など、近世初期から幕末期に至る絵図類を中心とした65点の史料からなる。その内容から黒田家関係者の旧蔵によるものと推定される（木越2012b）。なかでも封筒に一括された寛永2年以降の南外堀等の計画図や普請小屋、石上場等の借地図13点は、大坂城第3期工事の実態を研究する格好の史料といえる。以下では寛永5年の南外堀普請に直接かかわる5点（史料2～6）について検討を加えたい。

各絵図の検討に入る前に大坂城南外堀の縄張り（平面プラン）を確認しておきたい。竣工した二ノ丸側南辺は南東隅（2番櫓）―南西隅（7番櫓）の間に6つの折れ（隅角部）があり、石垣は7面構成になっている。壁面番号（村川1970）は東から56、58、60、62、64、66、68号壁となる（図2の④現況図参照）。このうち58号と62号壁が凸部、60号壁が凹部をなし、他は片折れとなる。これを本石垣Aタイプとする。水敵は、南東隅―南西隅の間に4つの隅角部があり、石垣は5面構成になっている。82号壁が凹部をなし、ほかは片折れとなる。



図1 徳川期大坂城普請の時期別工区と南外堀の位置

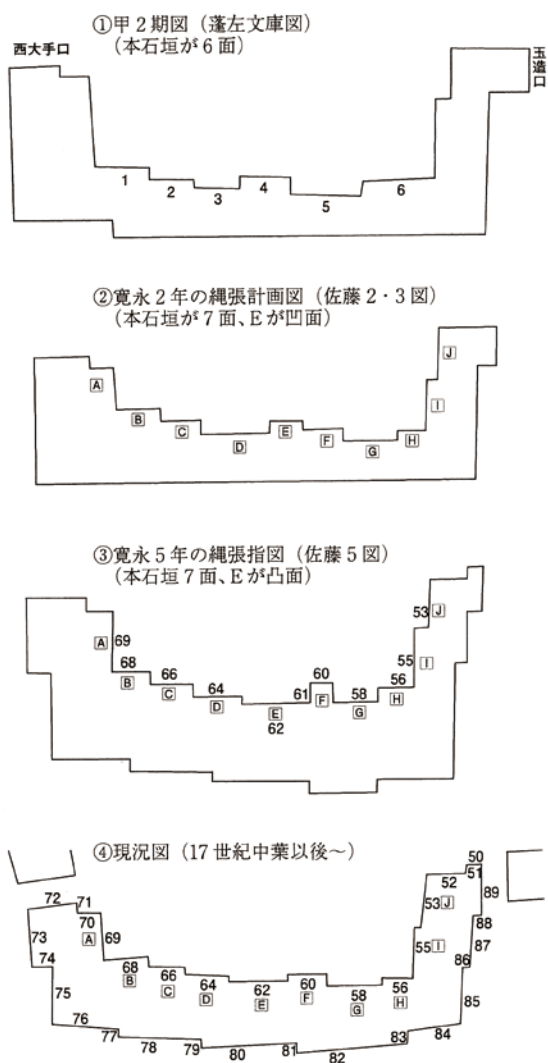


図2 南外堀縄張り計画の変遷(木越2012b)

(2) 佐藤史料2(図3)・佐藤家史料3(図4)

史料2は柱書に「大坂御二丸南輪絵図控」、末尾に寛永2年6月2日の年記と神田吉太夫（花押）の署名がある⁽²⁾。史料は参加大名及び築坪等を書いた文字情報と二ノ丸曲輪の南辺を描いた絵図からなる。紙背にも絵図があり、これについては後述する。

絵図中央に総石垣坪を14,594.04坪と記し、参加大名の総知行高4,740,663石で割って、万石当たりの築坪を30.787坪と算出している。続いて組ごとの内割を記すが、四組の坪数の和は14,595.07坪となり、冒頭の数値と僅差ではあるが合致しない。万石当たりの築坪30.787坪は後者を知行高で割った値であり記述が整っていない。ほかに組ごとの参加大名と本役・半役の別、役高が列記されてい

る。

史料2は南外堀の本石垣と大手口、玉造口を描いている。水敵や中仕切りはない。本石垣の凹凸がAタイプとは異なっており平面プランは58号壁と64号壁が凸部をなし、62号壁が凹部となる。この縄張りをBタイプとする。本石垣の平面形が「大阪御城之図」(国立国会図書館蔵)など、一般に知られている3期分を編集して作成した大坂城絵図(乙類図)とは異なっているのが特徴である。

絵図には石垣面ごとに根石幅と築坪が書き込まれ、片入角(端部の三角形部分)についても各隅角部に別記されている。また、坪数計算の割増し分を示す「込坪」は玉造口の土橋、50号壁から南東隅の56号壁まで、大手口の70・71号壁にみられる。53号壁40間は北26間と南14間に分けて積算されており、史料3ではここに小さな折れが描かれている。これは第1期工事による石垣の築止めの位置とみられ、1割5分の込坪は元和6年の古石垣を撤去し、再築する範囲を示したものであろう。

史料2と史料3とは縄張りや築坪等の数値が近似している。木越は前者が草案であり、これを整序したのが後者だとし、異筆ではあるもののともに幕府内で作成された絵図とみている(木越2012b)。

一方、両図は類似しているが違いもある⁽³⁾。注目したいのは、史料2において地口ラインに沿って祢(根)石間数を注記した箇所が3か所ある点である。縄張りが違うので直接対比できないが、仮に東端を56号壁とすると、58号壁、62号壁、64号壁の3面に根石間数を書いている。これは当初設計からの変更を示唆する。58号壁が23間に対して43間2尺4寸、62号壁が32間4尺に対して12間4尺6寸、64号壁では38間に対して58間2尺4寸となっており、その差はかなり大きい。これを史料3と照合すると、この数値が引き継がれたことがわかる(表1)。二ノ丸南辺では史料2と史料3の坪数は全く同数であり、したがって前者の坪数もこの根石幅に基づいて算出された数値といえる。

それでは、史料2の当初の根石間数はどこから来ている

表1 絵図にみる南外堀本石垣の地口間数

壁面 番号	地口坪割図		佐藤史料2		同左(根)		佐藤史料3		佐藤史料4		佐藤史料5	
	間	尺寸	間	尺寸	間	尺寸	間	尺寸	間	尺寸	間	尺寸
56	欠		23.0				23.0		23.0		23.0	
58	欠		23.0		43.0	2.4	43.0	2.4	44.0	1.5	44.0	1.5
60	23.0		32.0				32.0		17.0	3.0	17.0	3.0
62	欠		32.0	4.0	12.0	4.6	12.0	1.5	52.0		52.0	
64	38.0	3.0	38.0		58.0	2.4	58.0	2.4	30.0		30.0	
66	27.0		27.0	3.0			27.0	3.0	26.0		26.0	
68	33.0		31.0				31.0		32.0		32.0	
計			206.0	7.0			226.0	9.3	224.0	4.5	224.0	4.5

のか。第1期工事の外堀の縄張り(計画)を示した「大坂御城御普請ニ付而諸大名江地口坪割之図」(山口県立文書館蔵、以下「地口坪割図」)には石垣上に間数が書かれている⁽⁴⁾。南外堀の本石垣を7面構成で描き、折れの出入りは史料2と異なるAタイプである(図11)。木越はこの図が、第1期工事着手前の豊臣期の遺構ではなく、元和6年段階ですでに構想されていた二ノ丸南辺の姿を描いたものであろうとする(木越2021b)。第1期工事に先立ち、元和5年9月初めに將軍秀忠は普請総指図役となる藤堂高虎を伴って大坂を訪れ、縄張りについて指示をしている⁽⁵⁾。老中奉書の形で各大名に普請命令が発せられたのは9月16日である⁽⁶⁾。「地口坪割図」の本丸・内堀は豊臣大坂城の旧態を描くが、南外堀を含む外堀全体(二ノ丸)がこの時点の縄張り構想としてあっても不思議ではない。

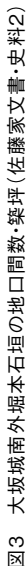
石垣面の間数は、貼り紙が残存する(59号壁が8間)、60号壁が23間、64号壁が38間3尺、(65号壁が2間)、66号壁が27間、(67号壁が2間)、68号壁が33間である。紙の剥落によって間数を欠く箇所もあるが、史料2と比較すると縄張りの差異に影響のない西側3面(64・66・68号壁)は概ね合致している(表1)。

これから、史料2は南外堀本石垣について、「地口坪割図」から窺える元和6年段階の計画(Aタイプ)から、寛永2年時点で後述する紙背絵図とともに縄張りを再検討する過程で作成されたものと理解しておきたい。

もう1点は、大名組の組境がある55号壁、60号壁、68号壁の地口間数の割り方が、史料2と史料3で若干ずつ変化している。60号壁32間を例にとると、史料2では池田組が18間2尺5寸4分、鍋嶋組が13間3尺4寸6分から、史料3ではそれぞれ18間1尺5寸6分、13間4尺4寸4分に変化した。史料3は単なる史料2の清書ではなく、公儀普請の均等負担の原則により、縄張りや坪数の微調整を行った経過を含んだものと評価できる。割普請を行うにはまず縄張り案に基づいて、地口間数、高さ、総築坪を算出し、参加大名の総役高で万石当たりの坪数が割り出される。そして、大名組の編成に基づき、組ごとの担当丁場を割りあてていく。両図はこのような作業過程を具体的に知ることができる点で貴重な史料と言える。

(3) 佐藤家史料2の紙背図(図5)

今回新たに取り上げるのは上記で検討した史料2の紙背を利用して描かれた絵図である。史料2の紙背は後世に裏打ちがなされており、直接紙面を観察することができな



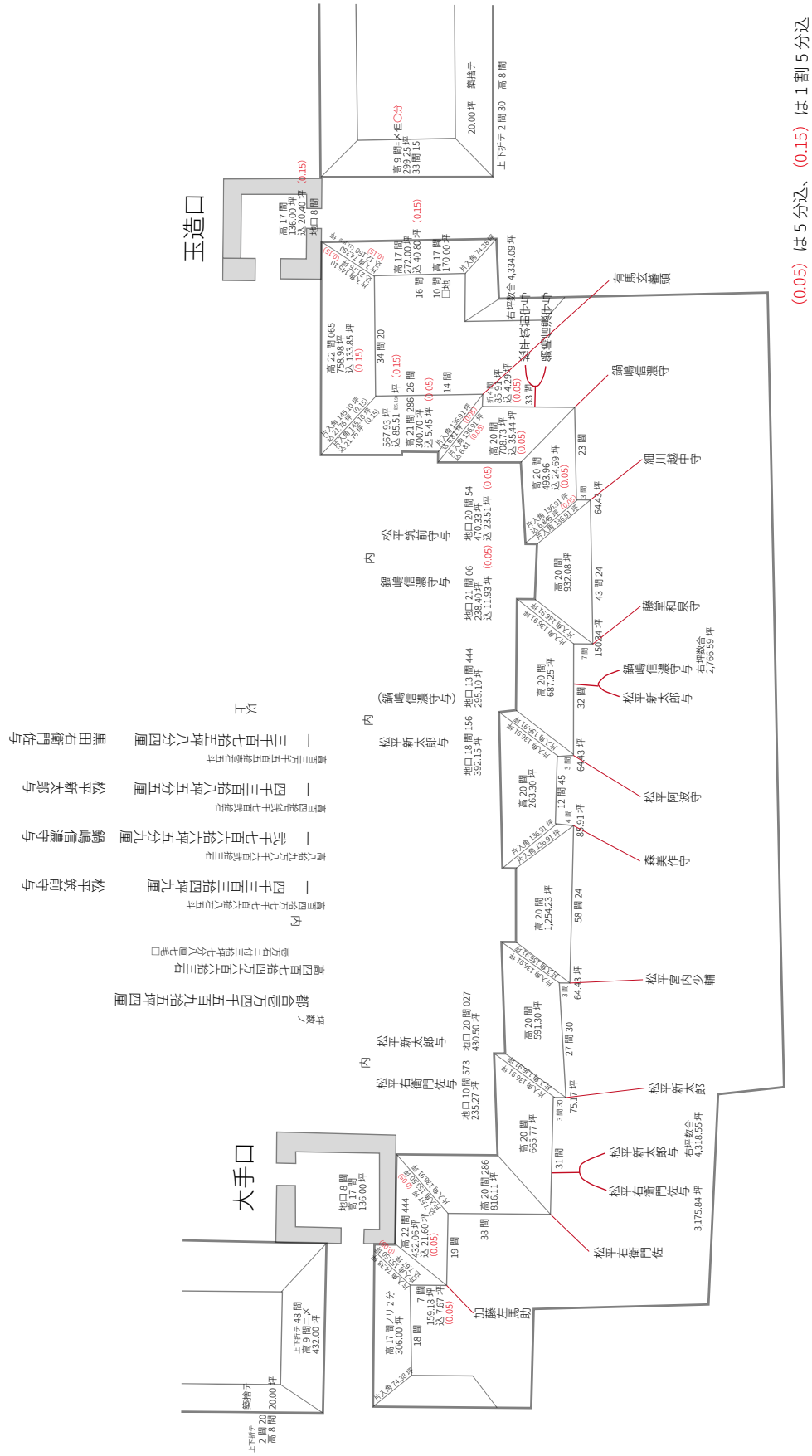


図4 大坂城南外堀本石垣の地口間数・築坪 (佐藤家文書・史料3)

(0.05) は5分込、(0.15) は1割5分込

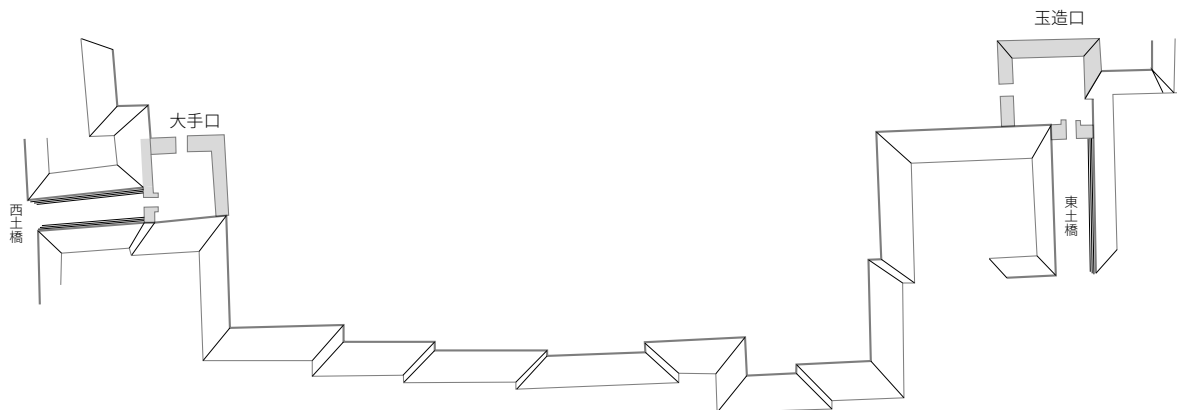


図5 大坂城南外堀本石垣の縄張り(佐藤家文書・史料2紙背)

い。ここでは表面からトレースしたものを反転して掲載した。

本石垣の縄張りは7面構成で、58号壁と62号壁が凸部、60号壁が凹部をなすAタイプである。表裏之図は玉造口枡形の頬当をL字型⁽⁷⁾に描いており、枡形東辺に折れを表現している。製図のタッチもよく似ている。寛永5年の史料5から登場する前田家担当の隅角部(51-52号壁)が描かれないなど共通点が多い。

表裏の図のどちらが先に描かれたのかの判断は難しい。寛永2年の反故紙を利用して、史料4・史料5が示す寛永5年以前に後筆された可能性は残すものの、両図の共通点からは同一人物あるいは同じ役所内で近い時期に作成された可能性を想定しておく。寛永2年の時点で二ノ丸南辺の本石垣は7面構成と決まっていたが、縄張りには2案があり、地口間数や総築坪、組毎の内割について一旦はBタイプの計画に基づいて計算が行われていったのではなかろうか。

(4) 佐藤家史料4(図6)

裏書に「内ノ方中根切ノ会図」とある通り、本石垣の根切土坪に関する絵図である。したがって水敲は描いていない。石垣幅・根切幅のスケールを統一して両者の関係が分かるように作成したのが図7である。「辰ノ三月廿九日」とあり、寛永5年に作成された絵図である。大坂町奉行所にて幕府普請奉行から諸大名家奉行衆へ秀忠の黒印状と「覚書」が示されたのが2月23日(『中川史料集』)、後述するように5月1日には根石設置が始まっているので、着工直前の絵図であることがわかる。本図では本石垣の縄張りがAタイプに変更となっている。2月26日付で国元に工事の状況を報告した中川家の史料には「古ニ仰出候よりも根切3尺浅被仰付候」(『中川家記事』N204、竹田市教委

2011)とあり、その際に施工に係る細かな指示も言い渡されたとみられる⁽⁸⁾。

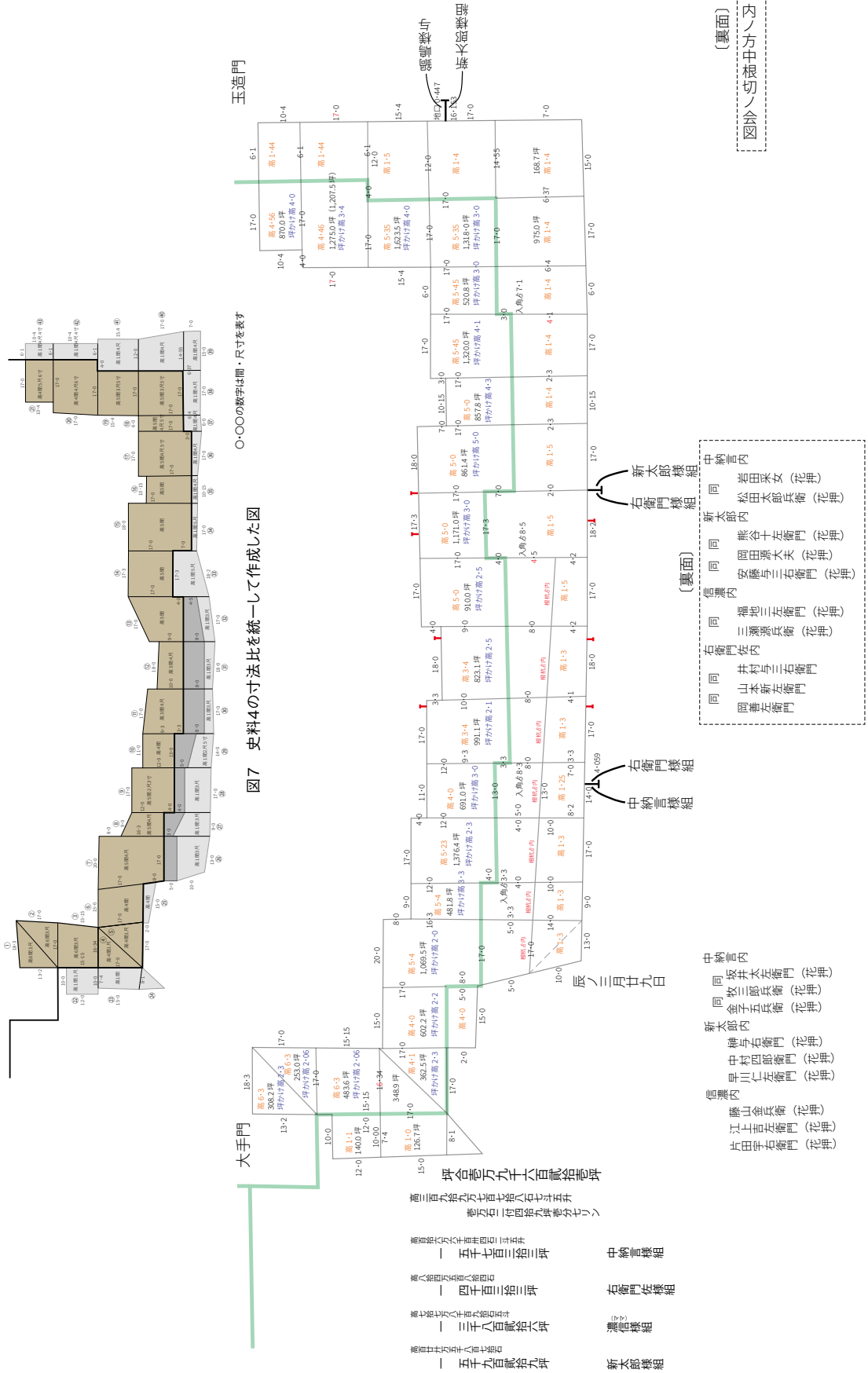
本図は本石垣の地口ライン(根石縄)と北側に天端ライン(撫縄)、南に杭列ライン(根切外四つ縄)を描いている(木越2012b)。西半の62～66号壁の間には「根杭5内」として深堀りを要したとみられるエリアが表現されている。56～68号壁の地口間数は、史料3では227間3尺3寸、史料4・史料5では224間4尺5寸とやや縮小している。

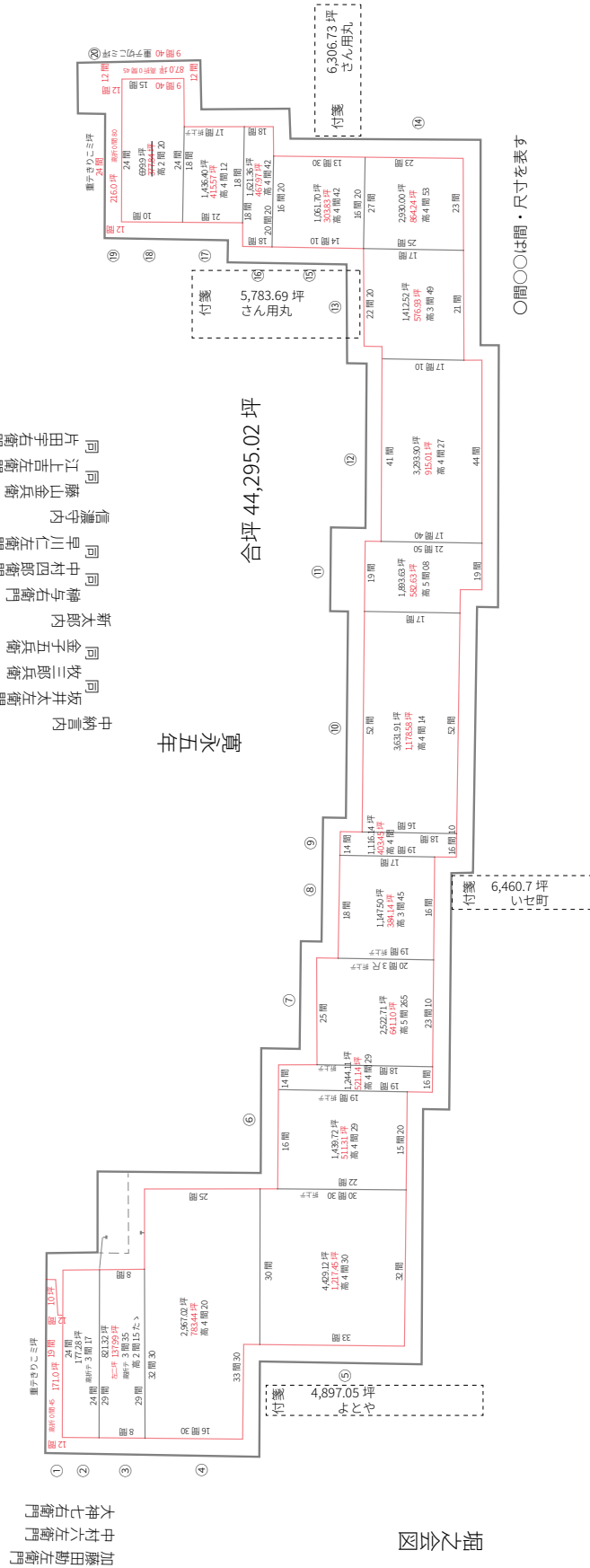
文字情報としては、表面に総築坪(19,621坪)、総役高(3,990,778.75石)、万石当たりの坪数(49.17)、各組の役高、築坪数が書かれている。日付の下には黒田家を除く3組の組頭下奉行各3名の署名と花押がある。4組の下奉行が集まり、写しの内容を確認の上、それぞれ署名しあって持ち帰ったことが想定される。さらに裏面には表面とは別の下奉行の署名があり、黒田家以外は花押を入れている。同様に各大名組頭の別の下奉行グループがチェックしている。

(5) 佐藤家史料5(図8)

本図は柱書に「堀之絵図」とあり、水敲も描いて掘削する土量を算出した絵図である。中央に「寛永五年」とある。総坪数は44,295.02坪と算出されている。史料4とセットになるものであり、水敲の根切土坪に関する絵図はないが、それらが揃うと全体の土工事量が算出できることになる。

年記の下には史料4表面と同一の9名の署名がある(花押なし)。柱書の下にある3名は史料4表面では欠いていた黒田家の下奉行と推定できる。組毎に署名の筆跡が類似しておりそれぞれ代表して一人が書いたとみられる。絵図は玉造口西側の隅角部(51・52号壁境)が新たに描かれたのが特徴である。大名組4組の担当丁場に合わせて付





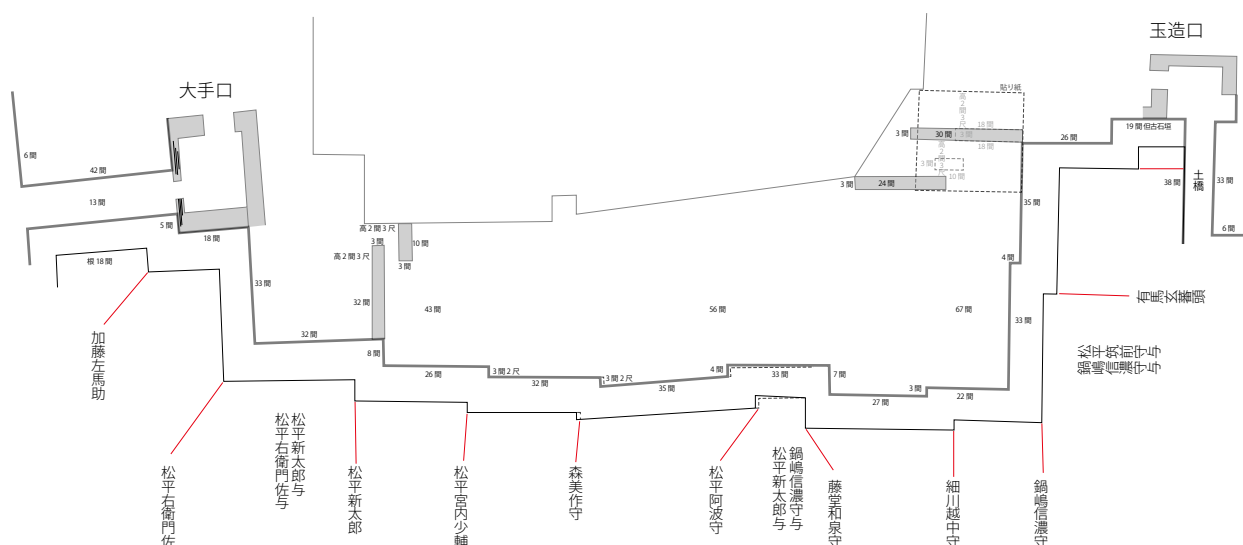


図9 大坂城南外堀本石垣の天端間数と隅角部担当大名(佐藤家文書・史料6)

箋が貼られており、掘削した残土の搬出先や土量を書いたとみられる。前田組と鍋島組は算用丸へ、池田組は「いせ町」、黒田組は「よとや」とある⁽⁹⁾。

絵図には18ある区画ごとに墨書と朱書の坪数、高さが書かれる。木越はこの坪数はそれぞれ本根切と中根切の数値と解釈している(木越2021b)。この堀底掘削の土工事は日用により実施され、各大名家で割符したことが『大坂御二ノ丸南輪御普請之時万日用銀四組割符御帳』(蜂須賀家文書)に記されている⁽¹⁰⁾。高さは東西土橋よりは浅いが、ほかは概ね4間程度、深い所は60号壁と66号壁の南側で5間以上となっている。大手土橋72号壁や玉造土橋89号壁、52号壁にある「重テ切コミ坪」は土橋沿いを深く掘り込んだ分(「お好みかわり」)で、前者は216坪+10坪=303坪、後者は171坪+10坪=181坪、合わせて484坪分を指す⁽¹¹⁾。

(6) 佐藤家史料6(図9)

本図は本石垣の天端間数と東西の中仕切りを描く。縄張りはAタイプである。本石垣から内堀までの間数も記載しており、二ノ丸の南曲輪を描くのが目的であったとみられる。東側の中仕切りは張り紙により配置や規模を変更した過程がわかる。西側の中仕切りは32間と長間になっているが、後に「折れ」を付けるよう指示があり変更となった。根石の据え付けが始まって1月ほどが経過してからのものである(『東武実録』寛永5年6月3日付(『大坂編年史』第5巻p78)。したがって本図は寛永5年6月以前の計画図とみられる。「寛永五年」の年記がある史料5と同様に、玉造口土橋

西側の隅角部(51・52号壁境)を描いている。墨線で地口ラインを描き、変更前のラインに朱線が入る。しかし、この隅角部には入る担当大名名は書かれていない。大手口70・71号壁境の隅角部は寛永2年段階に作成された史料2・3と同様「加藤左馬助」(寛永4年伊予松山から会津若松に転封のため第3期普請を免除)となっている。木越はこのほか前田利常が「松平筑前守」(寛永3年8月以降、「中納言」)と旧称で記されているように寛永4年以前の古い情報と寛永5年以降の新しい情報(玉作口隅角部)が混在した史料と評価し、史料2～5を得た黒田家が諸資料を参照して編纂したものと推定している(木越2012b)。

しかし、史料2～5には中仕切りの情報はない。西中仕切りの貼り紙や玉造口土橋の隅角部の朱線は幕府普請奉行内での縄張り検討の経過を示すものと解釈することもできる。60号壁、63号壁の天端、地口の線を引き直しており草案的な図とみるのが適当である⁽¹²⁾。本図の作成者が黒田家とするには根拠が弱いように思う。

3. 考察

(1) 南外堀の縄張り計画の変遷

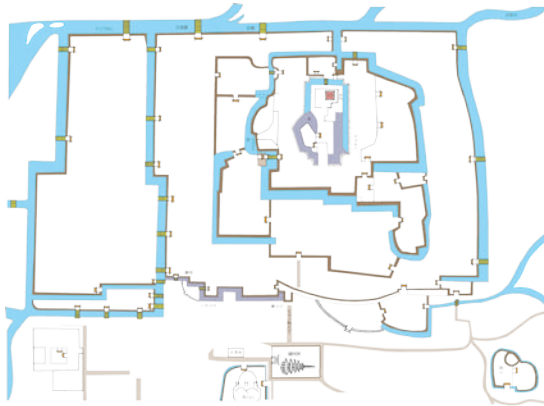
天正11年に始まった豊臣期大坂城の整備は大きく3期にわたって行われた(中村2018)。本丸に続いて天正14年からの二ノ丸、慶長3年の馬出曲輪、慶長19年の「大坂の陣」直前の整備である。その間、文禄3年には総構が造ら

れている。慶長年間の大坂城の姿については絵図や文献をもとにした諸研究がある（北垣1982、中村2006、中井2015、松尾2017）。本丸については幕府大工頭中井家に伝わった豊臣時代大坂城図により詳細な縄張りが知られるようになったが、大坂冬の陣直前の二ノ丸や外周の外堀を示す詳しい絵図は知られていない。

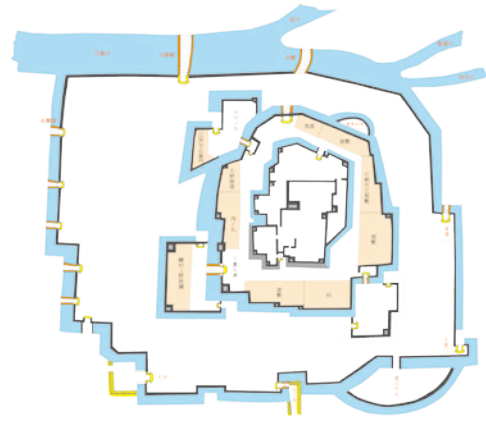
縄張りの様子をうかがわせる史料として「大坂冬の陣配

陣図」『偃台武鑑』、「慶長年間古図」（『金城聞見録』）、「撰津 大坂惣構」（浅野文庫『諸国古城之図』）、「慶長十九年甲寅冬大坂絵図」（中井正知・中井正純氏蔵、大阪くらしの今昔館寄託）などが検討の俎上にのせられてきた（図10）。

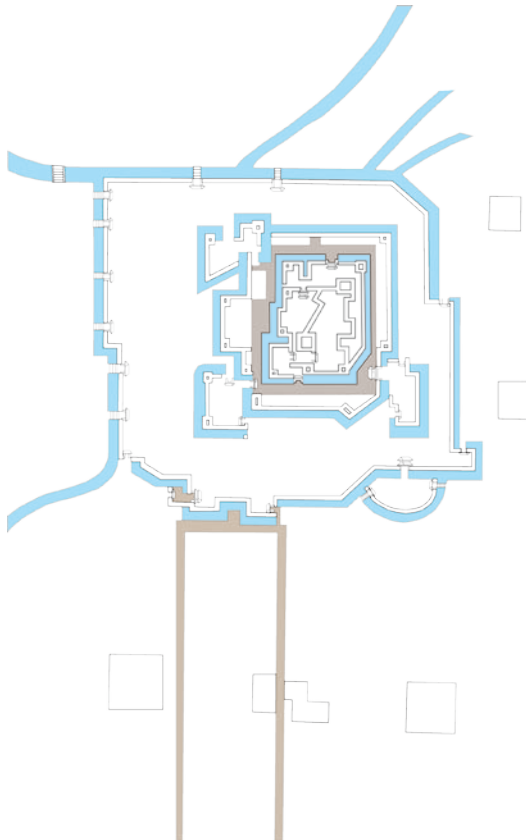
「大坂冬の陣配陣図」では二ノ丸南辺が3面構成、「慶長年間古図」では4面構成、「撰津大坂惣構」では2面構



大坂冬の陣配陣図（『偃台武鑑』）『仙台武鑑』「慶長拾玖年大坂合戦之図」により一部補正



大坂城慶長年間古図（『金城聞見録』 帝國図書館旧蔵写本をトレース）



諸国古城之図 撰津 大坂惣構（浅野家文庫）



慶長十九年甲寅冬大坂絵図（中井2015 図5より作成）

図10 豊臣大坂城を描いた絵図

成、「慶長十九年甲寅冬大坂絵図」では2面構成とそれぞれ描き方が異なっている。いずれも片折れで、南東部が最も南に張り出す。水敲側は簡略で石垣の有無は定かでない。縄張りについてはいずれも概念的な描き方であるため、それぞれの絵図作成の目的や系統関係などの分析を踏まえて論ずる必要がある。ここでは紹介にとどめたい。

次に木越が寛永元年の第2期工事の計画図と評価した「大坂御城図」(蓬左文庫、名古屋市立図書館蔵)がある(木越2012b)。本丸の本石垣の丁場割と第1期工事の外堀で隅角部を担当した大名名を記載する。第3期工事で行う予定となっていた二ノ丸南辺は6面構成で、東から2面目が突出している(図12)。水敲は簡略で西側に折れを1

か所描く。東辺、西辺は一文字で第3期に存在する折れはない。南外堀の東西両枡形よりに「是ヨリ南古石垣」とあり、第3期工事着工前の状態を表しているとするのは良いが、堀の縄張りを正確に描いているとみるのは早計であろう。豊臣期大坂城の縄張りと併せ後考を待ちたい。

南外堀の縄張り計画が具体化するのは元和5年秋である。同年9月初めに秀忠と藤堂高虎が大坂城の縄張りについて指示をした。外堀の第1期工事は大手口以北から玉造口以北となったため、南外堀の縄張りは幕府内部でも確定したものではなかったはずである。「地口坪割図」に描かれた南外堀の姿が(図11)当初の構想だった可能性は十分あろう。そこには本石垣7面構成、Aタイプで、石垣上には

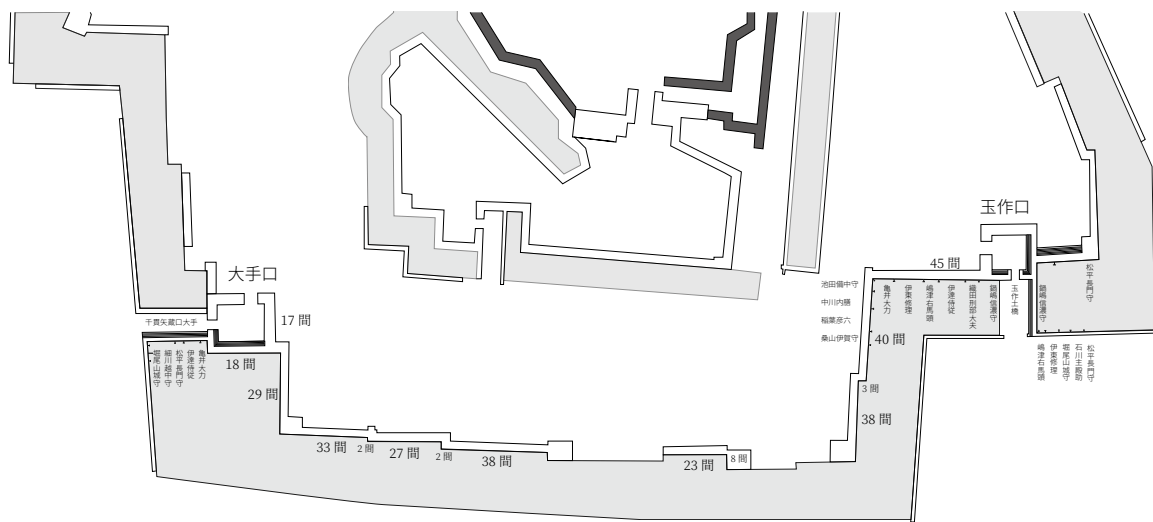


図11 大坂城甲1期図にみる南外堀(毛利家文書 地口坪割図 金沢城調査研究所2012より作成)

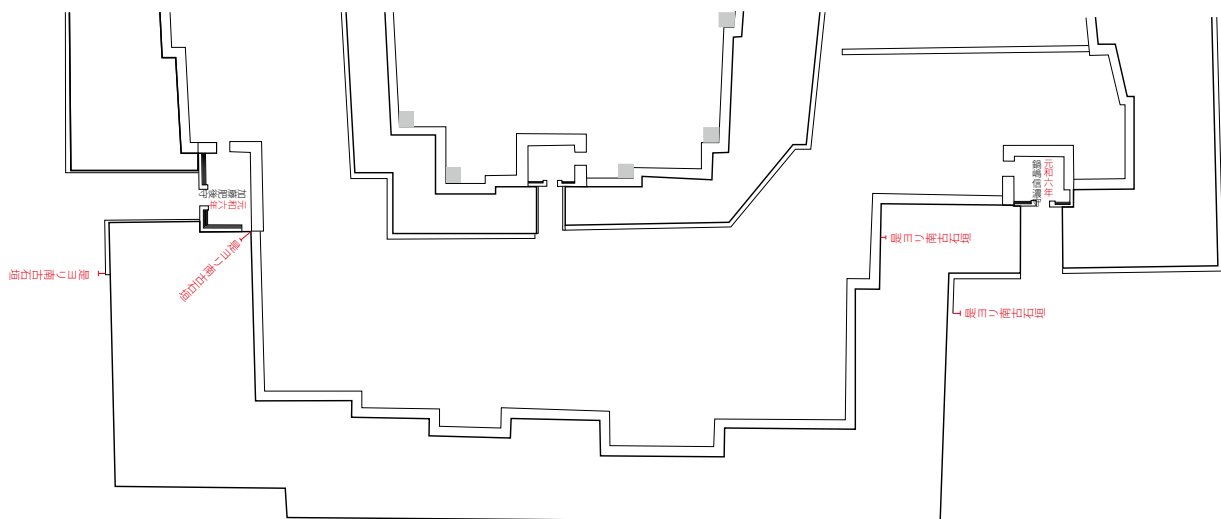


図12 大坂城南外堀甲2期図にみる縄張り(「大坂御城図」(部分)蓬左文庫 名古屋市立図書館蔵、金沢城調査研究所2012より作成)

「慶長年間古図」と同様、隅櫓が4棟描かれていた。

次いで寛永2年6月、佐藤家史料2(図3)が描く7面構成Bタイプの縄張りが登場する。しかし、これをもってBタイプに計画が変更となったとするのは躊躇される。史料2の紙背図(図5)が示すように寛永2年には同時に7面構成Aタイプの縄張りも検討されていたのではないかと推察される。当初、南外堀は寛永4年着工の予定であり、構想から基本計画へ具体的な検討がなされていた段階とみられる。その過程で構想段階の各面の地口間数が検討され、最終的には史料4(図6)・史料5(図7)が示すAタイプの縄張りが確定していった。中仕切りや本石垣天端の間数など二ノ丸曲輪を描いた史料6(図9)もこの過程で作成された絵図と考えておきたい。

(2) 二ノ丸南東隅角部の堀底で検出された遺構

ここでは二ノ丸南東角(2番櫓)の堀底から検出された遺構(秋山1973)について検討してみたい。この列石を伴う遺構は水が抜けて干上がった堀底から姿を現し(写真1)、1972年に大坂城天守閣がその性格を明らかにするために発掘調査を行った(図13)。その結果、高石垣の基礎

地形について興味深い知見が得られた。寛永5年築造の高石垣から9m離れたところに粘土層の切込みラインが巡っており、80cm下から栗石層が検出された。9mから外周列石約19mまでは砂層、砂礫層の互層となっていた。外周の石材からは符号や方位、人名など多数の墨書が確認された。報告書ではこれらを一括して徳川期大坂城第3期工事に係るものと性格づけた⁽¹³⁾。1971年・75年の国土地理院航空写真を見ると、干上がった外堀の高石垣際が犬走状に一段高くなっており、逆に堀の中央部は滞水により相対的に深かったことがわかる。

先に検討した佐藤家史料4(図6)は根切土坪の算出を目的とした絵図であった。南東隅は南に6間3尺7寸、東に14間5尺5寸、高さ1間4尺と書かれている。調査報告書によれば、石垣際より外へ9mの地点から粘土層が外周の砂層・砂礫層を切り込んでいるとある。そして、粘土層中には石垣際より約6.5mの位置に栗石層が検出された。栗石層の厚さは未調査ながら、中根切に敷設された基礎地形の遺構と考えられる。ただ、絵図で東側が南側の2倍強の距



写真1 水が枯れた南外堀(撮影1975年3月14日CKK748-C15-22国土地理院)



写真2 鍋嶋組本石垣の現状(南から)

離を持っている点は遺構とは整合しない。発掘調査で検出した遺構図と竣工後の丁場割⁽¹⁴⁾を重ねてみると、外周列石のうちAトレンチからBトレンチ中央まで整然と石材が並んでいるのはちょうど鍋島家の丁場ということがわかる(図13)。

佐藤家史料5(図8)は堀底を18の区画に分けてそれぞれの土坪を算出している。堀中央の掘削高は4間前後と本石垣の中根切りよりはるかに深いことがわかる。これが干上がった堀底の高石垣際が犬走状に見える理由であろう。

寛永5年の南外堀の根石設置から工事の進捗に関して豊後中川家(池田組)に注目すべき史料がある。現地に赴いた家老から国元への報告である。『中川家記事』N204(竹田市教委2011)は編纂史料ではあるが、地形の高低

や湧水状況、工事経過を伝える好史料である。

寛永5年工事は2月2日に秀忠の黒印状、23日に幕府普請奉行から諸大名に通知されたが、中川家では2月26日の現地からの報告に「古ニ被仰出候よりも根切三尺浅被仰出候」とあり、幕府からはかなり早い段階で工事の概要が伝えられ、さらに2月に掘削土坪に関する細かな指示も与えられていた。

一 此地御普請之儀、加賀衆組丁場ハ堀之地形五百餘土浅御座候付而、当月一日ニ根石置申候、鍋島殿くミ是も三百餘地ひくニ御座候、是も水出不被申ニ付而三日之七ツ時分ニ根石置申候、新太様くミ松平右衛門佐殿くミハ堀之地形も高水も出申故、四日之朝根石置申候、一刻半時

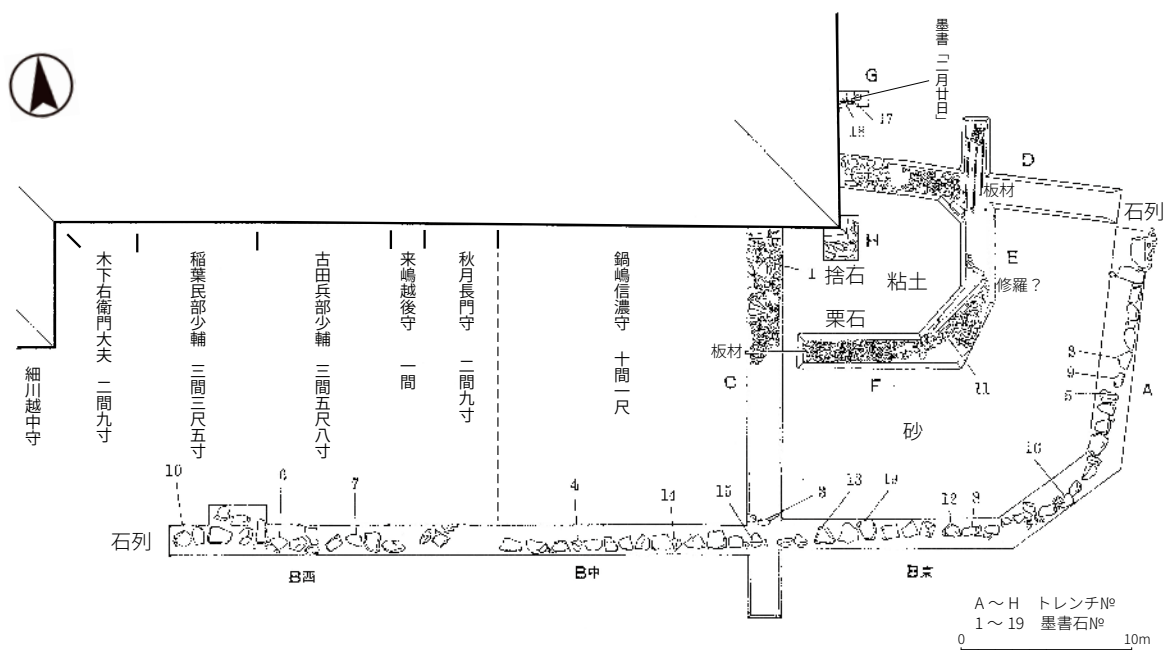


図13 南外堀鍋嶋組丁場堀底発掘調査平面図(大阪城天守閣1973に加筆、間数は蜂須賀家文書による)

之遅速ニ御座候、御丁場も新太様御くミニ而二三番切ニ根石置申候、早四間ほとつミ上申候、右衛門佐殿くミ西之土はしハ水殊外出申候間、未根石置不被申衆御座候
五月九日

一 御手前石垣、去四日之昼新太様・橋飛驒殿同事ニ地形迄は中ならし置申候、諸手何も跡先ニ多分出来申候、地形より上石垣式間三尺余あり申答ニ候へ共、先石垣を居付させ、其間ニ取水たいきの根切仕、石垣式三間も築上、堀をほり、扱本石垣ノ上をならし申答ニ相定申候
六月九日

前田組と鍋島組の丁場は掘削土量が少なく(もともと堀が深い)、湧水もない。前田組は5月1日に、鍋島組は3日夕刻には根石の設置が始まった。池田組と黒田組の丁場は地形が高めで水も出るの、やや遅れて4日朝に根石を置いた。黒田組の西土橋際は湧水が激しく未だ根石設置に至っていない。

6月4日、池田組の中川久盛、立花宗茂、池田光政らの丁場では地表より上2間3尺余りまで積み上がっていた。この間5月8日には普請を免除された加藤左馬助、浅野但馬守らからの献上石の受け取りがあった(「大坂御普請時四組御拝領被成大石栗石御帳」蜂須賀家文書)。

『綿考輯録』には細川忠利が5月14日付で現地から受け取った書状として「他家之丁場ニハ角石1ツ並高之由」とあり、5月上旬にはほとんどが最下段を積み終えていたことが分かる⁽¹⁵⁾。あわせて公儀普請奉行から「石垣八間築上候以後ハ、角石一日ニ一ツ宛上可申」と進捗の目安を申し渡されていることも注目される。諸大名は競い合いながら工事を急いのである。

なお、鍋島家は第3期工事で玉造口枳形の再築を担当するが、勝茂から現地派遣の家老への6月13日付け書状に「玉作口升形之儀、手前ニ請取候ニ相究之由、先日主殿・市佑々被申越候」とあり、それが決まったのは本石垣着工後とみられる⁽¹⁶⁾。

(3) 南外堀水敲82号壁問題

南外堀が干上がった1960年代後半、水敲際でも82号壁前面の堀底から崩落した石垣の残骸が姿を現した(写真1、図14)。中村博司はこの遺構の性格を志村清の実測図をもとに普請丁場割図と関連付けて論じている(中村1985)。中村は3期すべての丁場割を記載した絵図(木越



写真3 水敲83号壁の現状(西から)



写真4 水敲84号壁の現状(北から)

の乙類図)を水敲の面構成の違いによってA系統とB系統に二分し、年代差と解釈した(中村1986)。すなわち、寛永5年竣工時はA系統図にみられる4面構成で81号壁がない長大な石垣(138間)だったが、これが土圧に耐え切れず崩壊し、後に中央を2分割する形で修理され、その結果、B系統図が描くような5面構成になったとする。修理年代は細川家の編纂史料『部分御旧記』所収の寛永7年11月9日付け帳簿を引用し、同年に比定した⁽¹⁷⁾。

一方、これを批判的に継承した木越は両者の記載を総合的に比較し、乙A類(「大坂城普請丁場割之図」大阪府立中之島図書館蔵、「大阪御城之図」国会図書館蔵など)と乙B類(「大坂城攻丁場附図」大阪城天守閣蔵、「大坂御城之絵図并石垣丁場之書付」大阪市役所旧蔵など)に分類、再定義し、年代差ではなく書写系統の違いと捉えた(木越2012b)。佐藤家史料5(図8)から、5面構成の石垣プランは寛永5年にはすでに出来上がっていたとした。筆者も同意見であり、この点を補足しておきたい。

寛永5年8月15日付『大坂御二ノ丸南輪御石垣坪之御帳』(蜂須賀家文書)は第3期工事の中間決算にかかる史料である(木越2012a)。大名組4組57名の大名について

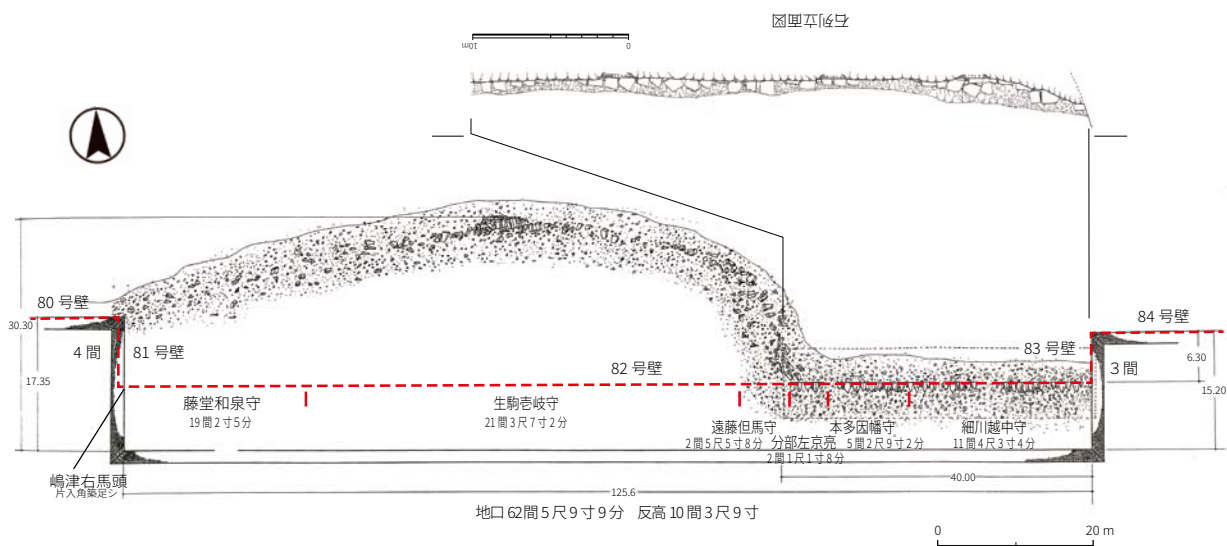


図14 南外堀水敲石垣80～84号壁(中村1985、志村清1972原図を一部改変)

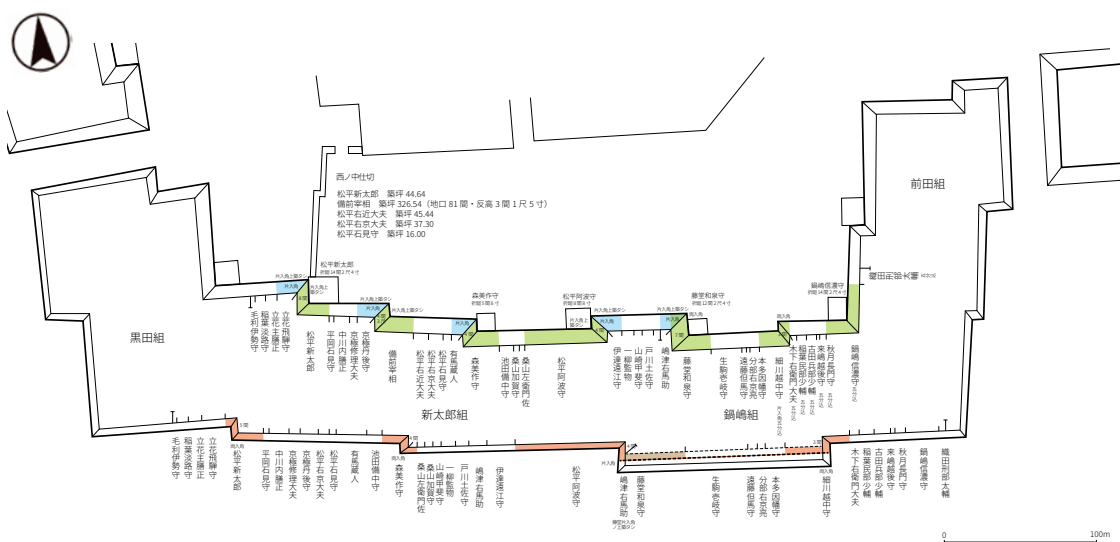


図15 第3期工事の丁場割図(蜂須賀家文書より)

それぞれ石工事(本石垣、水敲、狭間石、雁木石、水道、葛石、青屋口上ケ石垣、土留)をすべて坪数換算して列記している。石垣については地口間数とともに金高(鉛直高)と反りが書かれ、築坪(地口×反り高)の数値が検証できる。

ここで今問題の81号壁は新太郎組、83号壁は鍋島組に属する。前者は松平阿波守の丁場で、「片入角反坪」と「出角込坪」二間分の築坪がそれぞれ記載されている。続く82号壁の藤堂和泉守(鍋嶋組)の項には「片入角地口折テ二間」とあり、入角が丁場境になっていたことがわかる。藤堂の片入角の上部を新太郎組の嶋津右馬助が担当した。後者は細川家の担当丁場で「両入角反坪、地口折

テ四間」「出角込坪、地口二間分」の記載があり、木越が言うように寛永5年段階で両所にはそれぞれ出角と入隅があったことは確実である。

乙A類「大阪御城之図」(国会図書館蔵)にある丁場の間数は細川家丁場も蜂須賀家丁場も折れの使用を示す「合」の文字を用いており、間数の記載者は絵図の間違いに気づいてはいたはずである。乙B類では83号壁を非常に小さく描く(「大坂御城之絵図并石垣丁場之書付」『大日本史料』12-33 大阪市役所旧蔵)か、直線部分に二重線で出角を追記したとみられる例がある(「摂州大坂之御城普請丁場之図」金沢市立図書館)。81号壁は乙B類の「大坂御城石垣御普請町場絵図」では「四間」、83号壁は

同図や乙A類「大阪御城之図」では「三間」の記載がみられる。

残る問題は中村が注目した堀底で検出された石列の評価である。これは素直に解釈すれば、寛永5年竣工時に81号壁も83号壁も築かれており、当初から5面構成だったということになる。この想定では、東側の折れが約3間、西側が約4間になり、上記絵図や算用帳の記載と整合的である(図15)。算用帳の記載では82号壁の延長は63間=約124mとなり、志村が計測した125.6mに近似している。81号壁の出角はほぼ当初の位置で再築されたとみられる。

石垣は粗加工石を用いており、最上部は不揃いの目地となっているが、概ね布積みで元和・寛永期のものとして違和感はない。中村が懸念した83号壁と石列との切合い関係は志村清の実測図からは判断が難しく、現存する地口8間余りの83号壁を築いてから壁際に石材を寄せた(中村1985)とする解釈は十分ありうる。

図14は志村・中村原図をもとに、当初の石垣プランと丁場割を重ねてみたものである。丁場割図や算用帳ではすべて1間=6尺で計算するが、現地での実測値は1間=6尺5寸である。83号壁は絵図では3間となっており、志村図では石列の面と現状の84号壁との距離が6.3mと、3間の記載よりやや長い。これは崩壊石垣の根がもう少し北側にあることとおおむね解決できるものと考ええる。なお、83号壁の現状を観察すると、出角よりは石形が不揃いで石口が開き、横目地の通りが悪い。石材には鍋島家を中心に織田家、細川家などで用いられる刻印が分布している(写真3)。入角側はこれらを切って作っており、82号壁、81号壁にかけて規格的な石材による布積みが続いている。84号壁(写真4)は戦争中に爆撃の影響で大きく崩壊し、昭和45～49年度に修理された(大阪市1974)が、隅角部はわずかに旧態をとどめている⁽¹⁸⁾。

4.まとめ

本稿では寛永5年に実施された徳川期大坂城の南外堀普請について、計画段階から着工、竣工、修理までの経過について、「佐藤家文書」の再検討と関連史料をつき合わせて下記の点を明らかにした。

「地口坪割図」や佐藤家史料2の紙背に描かれた絵図を手掛かりに、元和5年に徳川秀忠や藤堂高虎が縄張りし

た本石垣7面構成A案の当初計画に対し、寛永2年から具体的な縄張りの検討に入ったが、このころにはA、Bの2案が併存していた可能性を指摘した。幕府では普請に参加する大名組の役高や築坪についてB案をもとに算出したが、寛永4年の工事が延期となり、寛永5年に入り具体的な工事量(根切土坪、堀底土坪)の算定、割符に入る頃には計画はA案に定まっていた。

元和6年の第1期工事で積まれた大手口・玉造口枋形及び周辺石垣、豊臣期の古石垣は日用普請で撤去され、引き続き第3期工事の参加大名によって中根切、本根切が行われた。二ノ丸東南隅の鍋島丁場の堀底で検出された基礎地形の遺構については佐藤家史料4の中根切と関連する可能性を指摘した。

本石垣の根石設置は同時期に行うのが理想であるが、旧堀底の高低や出水があつてすべての大名組が同時に始められたわけではなかった。それでも寛永5年5月1日には前田組丁場、3日には鍋嶋組丁場、4日には池田組丁場・黒田組丁場と後を追ひ、角石1日1段のペースを目標に歩調を合わせながら積み上げていった。

南外堀水敲82号壁問題については、竣工時から水敲は5面構成であったという木越説を追認し、堀底に残る崩落石垣を寛永5年当時の遺構と解釈して、担当大名の丁場割を復元した。

南外堀工事の実態に迫るには、木越が先鞭をつけた『大坂御普請之御帳』9冊(蜂須賀家文書)等、大名決算帳簿のさらなる分析が必要と感じている。近世初期の大名権力のあり方を知るうえで公儀普請が行った大規模土木工事の実態解明は非常に有意義である。関連遺構や史料に対して考古学、文献史学、民俗学、土木工学等の総合的研究が不可欠となろう。

謝辞

『佐藤恭敏家文書』の閲覧にあたり春日市奴国の丘資料館、森井千賀子氏にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

注

(1) 大坂城普請丁場割図の分類は、全3期の工事のうち、1期単独のものを甲類、第1～3期全体をまとめたものを乙類とする木越隆三の研究に準拠する(木越2012b)。

(2) 報告書では神田吉太夫について『寛政重修諸家譜』にみえる「神田与兵衛正俊」の一族・親類の可能性を指摘している(高山2005)。同家譜によれば正俊(将時)は父とともに家康に仕え、父の死後家を継ぎ、江戸城石垣普請や町割り等を行ったが、後に勘気を被り、寛永元年(「今の呈譜」では寛永2年2月10日)に亡くなった。慶長11年の江戸城普請では公儀普請奉行の要職をつとめている(白峰2000・2017)。跡を継いだのは孫兵衛正重で寛永2年に秀忠に仕えている。吉太夫の実名は不明ながら、幕府の普請方において実務を担当した幕吏であろうとする木越の見解(木越2012b)を支持する。

史料2は寛永2年6月の年記をもち、第3期工事の通達がこの時期にさかのぼることを示す点で貴重である(木越2012b)。木越は細川忠利の寛永3年9月27日付け書状(『綿考輯録(卷三十)』)から、当初寛永4年に計画されていた第3期工事はこのころに延期されたのであり、諸大名への工事の命令は御所・將軍上洛より以前とした。

(3) 史料2は本石垣だけを描くのにに対し、史料3は水敲側にも線を入れ、西側に2か所の折れを描く。史料2の各石垣には高さの数値を欠くところが多い。これは史料3と対比すると、一律に高20間となっていることから省略したとみられる。史料3の東西枡形は単純化した表現となっている。一方で大手口の71号壁を明瞭に描き、本石垣各入角の両面に片入角の坪数を書き込むなど面毎の数量を丁寧に記載している。石垣各面の地口間数と図のスケールは史料2のほうが史料3よりも実際に近い。これらは史料3が各面の築坪、大名組毎の築坪の整理に目的があったからであろう。

(4) 「地口坪割図」には大型図と小型図(木越2012b)があって、前者には堀に沿うように色紙が張られ、その上に石垣間数が墨書される。しかし所々剥がれ落ちており、これを模写したとみられる小型図は色紙が脱落した箇所には墨線を引いておらず、間数も書かれていない。後者は相応の時間を経てから作成されたものであろう。なお、隅槽は最終的には7棟建設されるが、本図では後の2番、3番、5番、7番の位置に4棟が描かれている。4棟とするのは「慶長年間古図」(『大坂聞見録』)と共通する。同図は水敲を2折れとしている。

(5) 「藤家忠勤録」『大日本史料』12-31(『大坂城再築関係史料』所収p73)

(6) 「黒田家譜」『大日本史料』12-31(『大坂城再築関係史料』所収p75)

(7) 大手口の頬当は史料2の表面図では折れはないが、紙背図には折れがある。そのほか本図は大手・玉造の両土橋に沿って雁木風の平行線を描いている。雁木風の表現は史料6の大手口頬当、甲2期図「大坂御城図」(蓬左文庫)にも確認できる。

(8) 「古ニ」は当初寛永4年に計画されていた第3期工事に係る諸伝達を指すものか。

(9) 「いせ町」「よとや」については、土工事に町方(商人)の関与を示唆するという意見がある(木越2021b)。佐藤家史料8には池田組と黒田組の小屋場が南外堀西側の大手前、札ノ辻の通りから呉服町筋の間にあったことがわかる。前田組と鍋島組は玉造口側に確保

されていたのであろう。『中川家記事』N204では2月段階で、各大名家が堀の南側に大石を寄せて、根切りの邪魔になっていたことが書かれており、石材は水敲側から搬入していたことがわかる。石材置き場や残土置き場、小屋場など工事ヤードが組毎にあらかじめ決められていたようだ。

(10) 「大坂御二ノ丸南輪御普請之時万日用銀四組割符御帳」(蜂須賀家文書 国文学研究史料館)は日用により行われた工事の場所や細かな作業内容、規模(動員人数=金額/単価)、請負先等がわかる点で貴重である。本史料によれば、元和6年施工の目付(枡形)及び堀の古石垣撤去は日用普請で行われ、各大名に割符された。損壊した本丸石垣の築き直しや大手口目付の崩れた大石の修理、水敲下3間根切工事が日用普請だったことなど、従来の史料では知らなかったこともある。二ノ丸には釣鐘を釣って作業の合図にしたことも普請風景を知る上で興味深い。

(11) この東西土橋脇の掘り込みが484坪分追加掘削になったことは佐藤家史料5の記載と対応するが、注目されるのは「お好みかわり」とあり、公儀の指示で急遽変更になった点である。

(12) 史料3と同様に隅角部担当大名を朱線で示している。本図の67号壁は天端が「八間」となっている。史料2・3では地口3間3尺、史料4になると8間となっており、寛永5年の縄張りとは共通する。50号壁の「拾九間但古石垣」は元和6年のものを指すか。なお、史料6には注(7)で述べたように大手口頬当に雁木風の表現がある。

(13) 墨書が目立つ外周石列を豊臣期の堀石垣の残骸とみる意見(中村2008)もあるが、根切りや裏込めの遺構、土台木の形跡はなく、少なくとも石列を根石とみることはできない。コーナーは湾曲しており隅角部の体をなしていない。徳川期に二ノ丸を縮小して石垣を築くにも違和感を覚える。

(14) 「大阪御城之図」(国会図書館蔵)では58号壁が24間2分、60号壁は44間2尺3寸7分2厘、62号壁は17間2尺4寸2分であるのに対し、寛永5年工事の中間決算書である『大坂御二ノ丸南輪御石垣坪ノ御帳』(蜂須賀家文書)では58号壁は23間1寸、60号壁は44間2尺9分、62号壁は18間3寸2分となっている。「石垣坪帳」は大名組下奉行が署名する決算書であり、地口間数と反り高、築坪が揃っているので相互に検証ができる。都合3期にわたる普請の情報を後年に編纂作成した乙類絵図は地口間数、丁場境、縄張の細部に誤記が多い。

(15) 『綿考輯録』(『大坂城再築史料』大阪市史編纂所p165)

(16) 『勝茂公譜考補』四(『佐賀県近世史料』第1編第2巻p367)

(17) 『部分御旧記』普請作事部五p699(『熊本県史』近世篇第三)。「破損丁場」の場所は明記されていないが、中村は南外堀水敲の可能性が高いとし、この史料に基づき「寛永5年の普請担当大名がこぞって修復していた」(中村2018)とする。しかし、ここに記載された総役高4,024,778.75石(桑山加賀守分を差し引くと4,011,578.75石)は寛永5年8月の中間決算のそれと同一であり、実際に全大名が参加して工事をしたのではなく、負担大名あるいは日用の役銀として割符したものと考えられる。

(18) 84号壁の修理範囲は工事報告書(大阪市1974)で確認することができる。事業着手直後の昭和46年5月9日撮影の航空写真(国土地理院)では石垣は崩落したままであるが、昭和50年撮影時には修理が完了している。

参考文献

- ・秋山進午1973『大阪城南外濠々底遺構発掘調査概報』大阪城
天守閣
- ・石川県金沢城調査研究所2012『城郭石垣の技術と組織』
- ・内田九州男1982「徳川期大坂城再築工事の経過について」『大
坂城の諸研究』名著出版
- ・大阪市1974『特別史跡大坂城跡城南石垣修築工事報告書』
- ・岡本良一1970『大坂城』岩波新書
- ・小野清1890『大坂城誌』(名著出版復刻1973)
- ・春日市教育委員会2005『佐藤恭敏家文書調査報告書』(春日市
古文書調査報告書 第1集)
- ・木越隆三2012a「徳川期大坂城石垣普請の造営組織と大名組の
役割」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所
- ・木越隆三2012b「徳川期大坂城普請丁場割図の分類と特徴」
『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所
- ・北垣聰一郎1982「豊臣時代大坂城「本丸図」と「真田丸」について
『大坂城の諸研究』名著出版
- ・北村清士1969『中川史料集』新人物往来社
- ・高山英朗2005「元和・寛永期の大坂城石垣手伝普請関係絵図に
ついて」『佐藤恭敏家文書調査報告書』春日市教育委員会
- ・白峰旬2000「慶長十一年の江戸城普請について」『織豊期研
究』第2号 織豊期研究会
- ・白峰旬2017「『(慶長十一年)二月廿五日付江戸城公儀普請奉行
連署状』について」『史学論叢』第47号 別府大学史学研究会
- ・続群書類従完成会1965『新訂寛政重修諸家譜』第9
- ・竹田市教育委員会2011『岡城跡石垣等文献調査報告書』
- ・中井均2015「大坂城の縄張り」『秀吉と大坂 城と城下町』和泉
書院
- ・中村博司1985「大阪城南外濠々底に眠る石垣遺構について」
『大阪城天守閣紀要』第13号
- ・中村博司1986「徳川時代大坂城普請参加大名の編成について」
大阪城天守閣紀要』第14号
- ・中村博司2006「慶長三～五年の大坂城普請について」『ヒストリ
ア』第198号 大阪歴史学会
- ・中村博司2008『天下統一の城 大坂城』新泉社
- ・中村博司2009「大坂城再築の経過と普請参加大名の編成」『大
坂城再築と東六甲の石切場』ヒストリア別冊 大阪歴史学会
- ・中村博司2018『大坂城全史』ちくま新書
- ・松尾信裕2017「『諸国古城之図』所収「摂津真田丸」図の再検
討」『大阪歴史博物館研究紀要』第15号
- ・村川行弘1970『大坂城の謎』学生社
- ・渡辺武1989「徳川幕府の大坂城再築」『新修大阪市史』第3巻
大阪市